

一九世紀前半のボン教教団の動向

三宅伸一郎

現在のボン教徒達は仏教と同様、寺院を中心とした教団を組織、その総本山にあたるのがメンリ寺である。発表者の関心は、この寺院を中心とした組織化がいつごろ、どのように行われたのかという点にある。

メンリ寺はシガツエの東方・約七〇キロ、ヤルツァンボ川北岸のトプギェー谷の奥に位置する。一四〇五年、東チベット・ギャロン地方出身のシェーラプギェンツェン（一三五六一—一四一五）により建立された。同寺建立以前、トプギェー谷にはエンサカという、ボン教徒の有力氏族ドゥ氏により経営されていた寺院があった。エンサカ寺はボン教のアビダルマ研究センターであり、かつ、寺院運営上最も重要な戒律を伝承していた寺院であったが、一三八六年、洪水で壊滅した。シェーラプギェンツェンは同寺の学頭であった人物であり、それゆえ彼の建立したメンリ寺には自然と、その伝統を受け継ぐ寺院としての権威が与えられたのである。

この権威化をさらに押し進めたのは、同寺建立から四〇〇年以上も経った一九世紀前半、メンリ寺第三代僧院長・ニマテンジン（*p.* 一八一—一三）である。ここで彼が鉄の狼の年、すなわち一八六〇年に著した『小力普頭鍵』での記述に注目してみよう。この書は、シェーラプギェンツェンへの礼賛文『勝利の館・功德藏』に対する注釈書である。『勝利の館・功德藏』は「口頭伝

承」に属するタイプのテキストであり、シエン・ニマギェンツェン（*p.* 一三六〇）に伝承され、彼が文字に著したといわれている。シエン・ニマギェンツェンは、シェーラプギェンツェンと同時代の人物で、中央チベットにおいてボン教を継承していた四大氏族の一つ、わけても開祖シエンラプの子孫として最も尊敬されるシエン氏の出身である。ニマテンジンは注釈の中で、シエン・ニマギェンツェンがメンリ寺にやって来た時、この礼賛文とともに、次のような宣言を残していったと記している。

ムギエル・シエン氏は、白い帽子ボンの教えを保持する者達
はもちろん、ボン教の家系を守るすべての者によって最高の
尊敬を受ける。シェーラプギェンツェンは没しても、彼を受
け継ぐすべての者達は、ムギエル・シエンをはじめとする僧
侶すべてから最高の尊敬を受ける。私（シエン・ニマギェン
ツェン）はこの礼賛文を教えの偉大さを示すために与える。

〔小力普頭鍵・*t. 1. 206. 43a3*〕

この宣言は、ボン教最高の世襲カリスマ・シエン氏が、シェーラプギェンツェンおよびその継承者に対し敬意を表すという構造を持つている。実際にシエン・ニマギェンツェンがこのような宣言を残したか否かは明らかではない。しかし少なくともニマテンジンは、こういった宣言が残されたと考えていたに違いない。彼は、世襲カリスマの力を最大限に利用しつつ、シェーラプギェンツェンの人格化とメンリ寺の権威化をはかり、同寺を中心とする教団の再編成をはかったのである。彼が、新築なったメンリ寺の「カンギェール・ハカン（蔵経堂）」の壁に記すべく、シェーラプギェンツェンの『略伝』を著わしたことも、その意味で注目に値する。では一九世紀前半というこの時期に、なぜ教団の再編成

が要請されたのか。

まず第一にユンドゥンリン寺の建立があげられる。この寺院は、ニマテンジンの兄弟子にあたるダワギエンツェン（一七九六—一八六二）により一八三四年「教義哲学」の道場として建立された。以降、ボン教学僧達は、ツァン・ロン地方にあるサキヤ派のデーユル・キーツェル寺に赴くことなく、自らの寺院で教義哲学の修行に打ち込めるようになった。第二に、ドゥウ氏がトプギエン谷を去って行ったことがあげられる。それはドゥウ氏から五世バンチェンラマ（一八五五—一八八二）が選出されたことによる。新たな中心的寺院の建立と、世襲カリスマの喪失という状況の中、教団の再編成が要求されたであろうことは、想像に難くない。

さて、チベット全体を見ても一九世紀前半は、大きな歴史的転換の時期であった。それは一八五四年から一八五六年にかけてのネパール・グルカとの戦争によってもたらされた。清朝は太平天国の乱鎮圧のため十分な援軍を出せず、結果チベットは、グルカの要求を呑まざるを得なかった。鈴木中正はこの戦争の結果を

有名無実の宗主藩属関係のみを残して、清朝より離れて独自コースを辿りゆく端緒が開かれた。〔鈴木一九五一・三三五〕

と述べている。

グルカとの戦争は、一七八八—一七九二年にかけても起きていた。この時チベットは、清朝の援軍を得て勝利することができた。この戦争を引き起こした一〇世シャマルパ・チョータクギヤムツォ（一七四二—一七九二）はグルカの敗退後恨みを残して自殺、その後チベットの悪霊となっていた。ニマテンジンの師であるメンリ寺第三二代僧院長ソナムロドゥウ（一七八四—一八三五）は、こ

の悪霊の魂を従わせ、「タクパセンゲ」というメンリ寺の守護尊とした。この守護尊の力を借り、再度のグルカ侵入を防ぐため、ボン教徒のバンチェンラマが選ばれたのでは、と推測される。

一九世紀前半を扱ったチベット史研究の数は少ない。グルカとの戦争についてみても、例外ではなく、Petechはその理由を

ネパールとの戦争は、つい最近まで、中国語資料は稀であり、チベット語資料はたいした情報を与えてくれず、ほとんどのネパール語の文書ははまだ出版を待っている段階であり、たいへんおそろかにされ、いままお十分に知られていない。

[Petech 1973:6]

と、資料的制約にあると述べている。

当時のボン教団の動向を記述する上でも、状況は同じであった。しかし、一九九八年のナチュ地区のボン教活仏テンペーニマ師によるボン教のテンギール発行によりその状況は一変した。その中には、これまで知られていなかったいくつもの資料を見出すことができる。たとえば

ダワギエンツェン伝『解脱普照清導』

テンギール第一五二巻所収

ダワギエンツェン伝『全信仰普照清樂導』同第二二八巻所収
ニマテンジン伝『善説具十万光智除暗灯明』同第九〇巻所収

等である。これらの資料を解説し、当時の教団の動向を明らかにしてゆくのが今後の課題である。